いながら指名した。それはすごいですよ」

3年生までは速かった足が遅くなったことから、そのスカウトはケガについて調査していた。選手とスカウトが会うことができた当時、谷沢さんは直に知らされていた。

「だから、僕、本当はね、プロに行きたくなかったんです。社会人に行こうと思ってた。足のことが不安だったからね」

どの文献資料にもなかった言葉に衝撃を受けるが、大学時代から痛み止めの注射が欠かせなかったとのことで、希望に満ちあふれて新たな世界に挑めなかったのは確か。逆に言えば、谷沢さんの不安を知っていながら指名した球団に入ることは、必然だったのか。早大で3年生まで付けていた背番号14をつけ、中日に入団する。

「行くなら東京のチームに行きたかったんですが、スカウトの方が本当に一生懸命でね」

## 変わるきっかけは王さんからの助言

入団時、中日の監督は水原茂（元・巨人）だった。この水原と確執があった4番打者の江藤慎一が、谷沢さんと入れ替わる形で退団。江藤は首位打者を2回獲得した（当時）右の強打者で、その穴を埋める選手の一人として、谷沢さんは即戦力を期待された。

実際、1年目の70年は7番・レフトで巨人との開幕戦に出場すると、プロ初打席で初安打を放って上々のデビューを果たす。5月下旬、新人ながら打率がリーグトップになった頃には周りの評価も人気も急上昇。常に絶えない笑顔で〝谷沢スマイル〟といわれ、巧打が光る打撃は名人肌と称され、「闘将」と呼ばれた豪傑タイプの江藤とは正反対だった。

「でも、5月末からドーンと落ちて、梅雨時期から夏場にかけて率が下がって…。ピッチャーもよかったけど130試合なんて経験ないから、どんどん、疲れとともに落ちていくんです。足は何とか持ってたけどね」

不振でも二軍降格はなく、最終的には126試合に出て規定打席に到達し、打率・251、11本塁打、45打点。新人王に選出された。当時コーチのウォーリー与那嶺はハワイ出身で米マイナーでもプレーしている。アメリカ仕込みの打撃を体得した谷沢さんへの助言が、生きる部分もあったのではないか。

「それが全然、打撃理論が合わなくて。だからウォーリーが『こうやれ』って言っても、僕ね、上の空で聞いてたの。そしたらウォーリーが『おまえどこ見てんだ!』って怒ってね。それでも一切、言うこと聞かない。シーズン終わるまで。あっはっは」

挨拶を交わしたときから続いていた〝谷沢スマイル〟が、一段とはじけた。

「習志野で石井さんに教わったタイミングの取り方が神経の中まで身についちゃってるから、ウォーリーが何を言ったって。はっはっは。打てばいいと思ってたから」

確かに2年目こそ打率・260だが、3年目から2割9分台が続いていく。数字だけを見れば、安定そのものという成績だ。

「いやあ、それもね、8月いっぱいぐらいまでは3割をキープしてるんです。で、夏の疲

【写真】産経新聞社

王貞治氏が使用して世界本塁打記録を刻んだバット製作者として名を馳せた石井順一氏。谷沢さんも石井氏の薫陶を受け、打撃技術を磨いた